礎でもある。

てることが一致するというのが倫理や誠実さの基礎であり、信頼関係の基 くなく、感じることが多く、というのがいい。また、言ってることとやっ っていないということを危惧しているのである。子どもの頃は、

知識は多

為が離れてしまっていると、知識は台なしになる。知識が体にまで降り立

ことになるんだよ」。知識があることは悪いことではない。しかし知識と行

脳科学と幼児教育

があったと言っても誇張にはならないであろう。 ほどの人で、MR-を開発した一人というのだから、 の世界的第一人者らしく「ノーベル賞に一番に近い」という形容詞がつく アートスタートフォーラムで小泉英明氏の話を聞いた。 氏は脳科学者 人類に対しての功績

伴ってくる。「やる気」が重要だということなのである。 っていない。「知ってるというけどやったの」「やってみて初めて知ってる っていることだが、自発性は意欲に後押しされ、自分でするという行為を 子どもが「そんなこと知ってる」などと言おうものなら美哉の先生は黙 幼児教育は子どもの主体性や自主性を育むのが使命であるとはいつも言

側に呼吸など生きることの根幹を担う脳幹がある(私もお世話になった仏 性のことであろう。それは、脳の外側である「新しい皮質」が担っている。 教学と坐禅の大家、玉城康四郎先生に「脳幹と解脱」という本がある)。 く生きるための脳」、古い皮質は「生きる力を駆動する脳」、さらにその内 志、 意欲などはその内側の「古い皮質」に所在がある。 新皮質は「よりよ ない。よく話題になる「前頭前野」もここである。それに対し、情動や意 **入間はここが肥大し、人間らしさともいえるので無理もないことかもしれ** - 脳の働き - 頭の働き」というイメージのもとで、頭の働きとは知性や理 こういうことが脳科学的に、脳の部位にもとづけられてきた。一般的な

> ているのだが、やろうっていう気がなければ宝の持ち腐れ。なので、古い 五感を窓口にして世界が流入し自分を作って行く。 だから幼稚園では頭を 皮質のところ・意欲や意志をまず育まないと!とのこと 私どもの従来の主張を援護してもらったかのような話である。 体験とは世界(人間が作ったのではない自然や社会)との出会いである。

使うのでなく体を使う。体験こそが教師なのだ。(園長通信第六回等)

がはるかにまさると言えるのである。 場で受け容れられている。だから人間という教師より体験という教師の方 識に上がったもの・大人が意図したものをはるかに超える情報が体験の現 身体性がいかに重要か、 実体験がいかに重要かということなのである。 意 体情報が集約されているとのこと。脳と言っても単に頭のことではなく 感動した時の脳の活動は「島皮質」に関わるそうである。島皮質には身

と。HPの「びさいの教育」にあげた「和の心・継承」で語ったこともあ ことで、まず母国語を小さいときはしっかりやって、できるだけ母国語の 反応するという。その音声テープを逆回しすると反応する部位が違う。つ ながち外れてないようである 自身はその言葉で決まってくるところが多い。」「英語は中学校からで十分_ 能力を高める」「母国語が自分のアイデンティティーに近いのです。思考法 とになる。それを受けて小泉氏は述べている。「最初に一本柱を通すという るというのだ。 胎内で母の言葉(まさに母語!)を学習しているというこ まり新生児はすでに母国語を単なる音としてではなく言葉として聞いてい また、母語を生後五日以内の子どもに聞かせると、左脳にある言語野が

思いがしたのであった。 という幼児教育の重要性が実証されていく こういうお話をうかがって、遊びの学校

小泉氏いわく、日本では脳の新皮質は鍛えられていて能力や知識はもっ



引用文献